

さくら流る、目黒川

昔々、あるところに、年老いた翁おきながいた。彼は非常に愛情深くやさしい者で、多くの人から親しまれていた。この翁、実に不思議な灰を持っており、一振りかければ、どんな木にも立派な花が咲くという。

時は、多くの書物、口伝によって後々に語られる出来事があつた数ヵ月後とて、翁は語り部のように独り言を呟いた。「そろそろ残りの灰が少なくなってきたのう。これでも節約というかケチケチした使い方がかりだったのになあ。最後までいいは華やかに散らせたいものじゃ。よし、残りの灰は一斉に使ってしまおう。どうだろうか、秋刀魚好きの友人の地に花を咲かすというの。…うむ、決定だ。さっそくやってみようか。友人もさぞ驚くに違いない。」

というわけで目黒川の桜というのは（弑殺「千本桜」とまではいかないものの）約八百三十本、三・八キロメートルにもわたる水辺の桜並木となり、各地から大勢訪れる桜の名所となりました。桃色の花霞ともいえるその川沿いを歩むと、あまりの凄さに圧倒される。またその散りゆく時の花吹雪、春の嵐ともとれるその景色は咲きたる時に負けず劣らずの壮大さ。一度と言わず、二度、三度と行かなければ損をすることだろう。

